

ありがとうあの日から三十二年夏の雲

あなたが旅立って、早三十二年が経つのですね。そちらの世界はいかがですか。あなたのことでですから、後から来る人たちを楽しませているのではないかしらね。

あなたとの結婚生活は十一年間という、短いものでしたが、たくさん楽しい思い出をもらいました。今更ながらありがとうございます。亡くなった時、五年生だった絢子は四十二歳、未だ独身で札幌でOLをしていますよ。一年生だった杏子は、あなたにおとなしかったあの子が沖縄の人と出会い、結婚し、二人の女の子のお母さんになったんですよ。上の子は一年生、下の子は三歳半です。沖縄で子育てしながら介護施設で介護の仕事をしています。三十九歳よ。二人ともあなたの亡くなった年齢を越しましたよ。きっと今、あなたが二人の孫を見たら、かわいくてかわいくてたまらないでしょうね。無理とはわかっていても見せてあげたい、会わせたいです。私はもう六十七歳です。人生って早いんですね。あれから私、頑張って中学校の教師になったのよ。運転免許も取って、釧路の中学校、富良野の三つの中学校に六十歳の定年まで二十二年間勤めたのよ。信じられないでしょうね。あなたに頼ってばかりの情けない私でしたが、二人の子どものため、がむしゃらにやってきましたよ。あなたが逝ってから、本当に数えきれないくらいたくさんの喜怒哀楽がありました。私がそちらに行ったら全て話してあげますからね。楽しみにしていてね。でも、あと少しこちらの世界にいらしてくださいね。

三十二年の間には、あなたの両親も私の両親も、同僚もお友だちも近所の方々も、そちらの世界に旅立っていきましたよ。

あなたの実家に行くと、今でもあなたの話をしますよ。みんな忘れていないですよ。「本当の死は、この世の誰にも思い出されなくなったとき」と何かで読みましたが、だいじょうぶ、まだまだみんなの心の中に生きていますよ。杏子の上の子のまほちゃんが四歳のとき、我が家に来たとき、仏壇の前で「おじいちゃん、飛行機に乗って天国に行ったの？」と聞いてきたとき、涙が出そうになりました。

これからも、私たちのこと励ましたり、叱ったりそちらから見守っていてね。

あなたが逝った日の夏空、白い雲が美しかったです。

今日の空も青く美しいです。

あの日から三十二年夏の雲